



津田塾大学  
学芸学部 教授  
**西川 賢**

**ソーシャルメディア・プリズム**  
**SNSはなぜヒトを過激にするのか？**  
クリス・ベイル 著 著／松井 信彦 訳  
みすず書房（2022年6月）3,400円＋税／240ページ

### 認知を歪ませる「プリズム」

今日では、多くの人がツイッターやインスタグラム、フェイスブックといったソーシャルメディアを日常的に使っている。読者は、ソーシャルメディアにおいて、どのような人々とながら、どのような意見を日常的に目にしているだろうか。

本書の著者であるクリス・ベイル教授によると、ソーシャルメディア上で人は自分と似たような人とながら、同じような価値観に触れ、自分の見たいものだけを見るという。そうすることで自己を正当化し、自己承認欲求を満たす。これが「エコーチェンバー」と呼ばれる現象だ。また、ソーシャルメディアでは過激な立場の人ほど声が大きく目立つ傾向があるが、他方で穏健な立場の人は、特に政治など炎上につながるかねない話題ほど、あまり発信しない。

こうなると、常識的・穏健な意見が目立たなくなり、過激な言動ばかりが目につくようになる。こうして、ソーシャルメディア上では、人は自分の立場の正当性を確認するとともに対立する立場の人々の考え方や価値観を実際よりも過激なものとして認識してしまい、相手側の全員が過激だと思込む。これは深刻な対立を生み出す元になる。

これが「偽りの分極化」である。まさに、ソーシャルメディアは、われわれの認知を歪ませる「プリズム」なのだ。

ソーシャルメディア上の両極端な立場の人々が「エコーチェンバー」から足を踏み出し、反対側の意見に触れれば相互理解が深まり、万事丸く収まるだろう——そう考えた読者がいたとすれば、甘い。ベイル教授が、ある立場を取る人々をわざと反対側の意見に触れさせる実験を行ったところ、より強硬な意見を述べるように変わってしまった人が多かったという。自分と異なる側の意見に触れると、意固地になってさらに過激化する人もいるということである。ソーシャルメディア上では、必ずしも「話せば分かる」とはいかないのだ。

ベイル教授はこう助言する。「ソーシャルメディア・プリズムがわれわれの認知を歪ませる仕組みを理解すること」「自分とプリズムとの関係性を把握するよう努めること」「プリズムへの悪しき関わり方を改め、相手方と時間をかけて生産的に対話する努力をすること」。

果たして、ソーシャルメディアはわれわれの日常生活を便利に、そして豊かにするものなのか。それとも、われわれの認知を歪めて不信感と誤解を生み、争いを発生させるものなのか。何気なく投稿する前に、深く考える価値のある問題に違いない。